

『現代インド研究』第4号特集の趣旨

現代インドを比較する

上田 知亮

「地域研究」は困難に直面している。学術研究が高度化・精緻化するとともに徹底的なまでに専門分化した今日、そもそもある地域を総体的に把握することを目指す「地域研究」など存立し得るのだろうか、それを可能にする分析手法など存在しないのではないかという疑念と恐れを多くの研究者が共有しているというのが実情であろう。19世紀後半以降に自然科学の専門分化が進んで博物学が成立し得なくなったように、世界各地の「事情通」を必要とした冷戦期のアメリカで誕生した地域研究も解体の危機にあるように思われる。経済学や政治学、社会学などに代表的教科書があるのに対して、地域研究にはその分野の学生や研究者なら誰でも一度は目を通したことのある標準的テキストと言えないものがないことが、学問領域としての危うさを象徴している。端的に言うなら、地域研究には確立した標準的な分析手続きが存在しないのである。

それならば開き直って「地域研究者」や「地域の専門家」の称号を放棄して、インドの政治(のごく一部)について政治学的に研究しているなら「政治学者」を名乗り、インド経済を計量分析しているなら肩書きを「経済学者」にすればよいとも考えられよう。ある国や地域の何かしらについて研究しているからといって「地域研究者」になる訳ではないのだから。優れた研究者ほど、数十年、数百年、さらには古典古代以来の二千年以上の時間のなかで鍛えあげられて確立されたディシプリン独自の観点から研究対象地域の僅かな一断面を観察しているにすぎないことを自覚しているものである。だからこそ地域の全体像を明らかにすることを夢見ながらも断念し、今日もこつこつと地味に細部の精緻化に取り組むのである。そしてそれ故にこそ、それぞれの研究分野は豊饒な成果を生み出し得たし、そこで描き出される地域像は驚くほど緻密なものとなっている。

今回の特集テーマに「現代インドを比較する」を設定した理由は、逆説的にもここにある。細分化して(悪意を込めるなら蝸壺化して)精緻化に血道を上げてきたからこそ、複数の研究領域を架橋することにより分断状況を克服する可能性が拓けてきたのである。今やそれぞれの研究分野において比較分析の手法が彫琢されているだけでなく、異なる学問体系を接合して新たな知見を得ようとすることや異分野の研究者が共著論文に取り組むことが人文・社会科学においても珍しいことではなくなっている。地域を比較するための様々な道具が地域研究者の手元には揃っているのである。一つの事例、一人の研究者、一つのディシプリンだけでは地域の姿を活写できない。様々なディシプリンから複数の事例を比較分析する幾人もの研究者が多様な現代インド像を持ち寄ることで、よ

り立体的で多彩に地域の姿を描き出すことが可能になるのである。様々な比較分析が今回の特集のなかで組み合わせられることで、現代インド地域研究は新たな境地を開拓できるであろう。

無論、一口に「比較」と言ってもその視点や基準には様々なものが考えられるのであるが、大別すれば、(1) 特定の研究手法に依拠して複数の対象を比較するものと、(2) 特定の対象を複数の研究手法から分析することで比較するものに分けられる。前者は一つの視点から複数の対象を観察することであり、後者は複数の視点から一つの対象を観察することになる。さらに(1)は、(a) 複数の対象を共時的に比較するものと、(b) 同一の対象について異時点間で比較するものに区分できる。例えば、現在のインド経済と中国経済を比較するのは前者、現在のインド経済を100年前や20年前の姿と比較するのは後者である。これらを組み合わせることにより、一層複雑で陰翳に富んだ比較分析も可能である。

こうした趣旨のもと、本特集は比較という手法を主軸に据えて現代インドに迫る4本の論考から構成されることになった。もちろん研究分野によって比較研究の手法やスタイルが異なる以上、そこで描き出される地域像にもそれぞれ違いがあるであろう。そうした差異を取って意図的に際立たせることで、「比較することを比較する」というメタ視点からも現代インド地域研究に新たな息吹を吹き込みたいというのが本特集を企画した編集委員会の狙いである。どの論文もこうした要望に応じて、各研究領域における比較研究の意義が異分野の読者にも伝わるよう、一般的・概括的な説明を盛り込みつつ個別事例の比較分析を展開している。一見すると雑多な寄せ集めに見えながら実は比較という共通の基軸をもつ多彩な論文を読み通した暁には、比較分析が地域研究の強力な道具であることが明らかになるであろう。

以下では、本特集に寄せられた4本の論文を、それぞれの比較の枠組みの違いに主に着目して紹介する。湊一樹「インド政治経済研究における比較分析—女性への議席留保が女性有権者の政策認識に与える影響を事例として」は、ビハール州ベグサライ県テガラ選挙区のグラム・パンチャーヤットを単位として、女性留保制度の対象であるかどうかという制度的差異が、全国農村雇用保証事業(NREGS)や女性および最後進階級への留保議席制度といった政策に関する女性有権者の認識・関心にどの程度影響を及ぼしているのか、計量比較分析の手法を通じて考察している。さらに湊論文は、トクヴィルや大塚久雄を引きながら比較と計量分析の意義を門外漢にも分かりやすく丁寧に、なおかつ情熱的に論じており、本特集の格好の案内役を買って出ている。

友澤和夫「インド自動車産業集積の比較研究—デリー首都圏とウッタラーカンド州を事例として」は、部材・資材メーカーや二次サプライヤーといったサポーティング企業をも包含する面的かつ重層的な産業集積が進んでいるデリー首都圏と、「特別カテゴリー州」に付与される制度的・政策的恩典を背景にインドでは稀なほどにメーカーと一次サプライヤーの分工場を中心とした生産機能特化型の産業集積が実現しているウッタラーカンド州という二つの代表的事例について、県単位のデータをもとに比較し、インドの自動車産業における空間的分業体系と集積内部構造を解明している。

地理学(とりわけ経済地理学)の学説史ならびにインド自動車産業の近年の情勢および全国的な空間特性を入り口として事例の比較分析へと導く流麗かつ堅実な手捌きは、他分野の研究者にとっても比較研究の一つの模範となるだろう。

これら湊論文と友澤論文は、前者が選挙区という地理的にかなり狭い範囲の内部にある違いを制度の差異によって考究せんとし、後者が州という広域的単位ごとに異なる特徴を経済的空間構造から解明しているという点で大きく異なっていると同時に、どちらもインド内部にある違いを手掛かりにしてその特質を浮き彫りにする視点は共通していると言えるだろう。

これに対して、川島論文と佐藤論文はいずれも、インドという国を単位としてそれを国際的に比較し、いわば外部からその特徴を明らかにしている。インドだけを見ては決して気付くことのできぬ重要な洞察と知見をマクロな視座から提供してくれているのである。

川島博之「インドの食料生産—中国、米国との比較」は、インドにおける食料(穀物や食肉、牛乳、水産物)の生産と消費の特質を、同じく巨大人口を抱え食料消費・生産大国である中国ならびにアメリカ(と、部分的には日本)と比較することを通じて明らかにし、経済発展に伴ってインドの食料事情が着実に改善していることを指摘したうえで、土地利用と人口増加率の点からその傾向が今後も続くとの展望を提示している。人口と農地面積がインドとほぼ同じ中国が養豚用に大豆を大量に輸入せざるを得ないのに対して、食肉消費量が急増しなかったインドは穀物自給を達成できたという興味深い知見は、まさしく比較の賜物である。人口が多く人口密度が高いにも拘らず食料問題をほぼ克服したインドの事例を、世界の食料問題に対して重大な意義をもつ一つのモデルとするためにも、さらなる比較分析の進展が今から待ち遠しい思いである

佐藤孝宏「指標からみたインド—環境の持続可能性と社会経済開発の現状」は、全世界レベルでの国際比較のなかでインドが占めている位置を明らかにすべく、環境の持続可能性に関する三つの指標(純一次生産量、バイオキャパシティ、エコロジカル・フットプリント)と社会経済開発に関する三指標(一人当たり国民総所得、人間開発指数、主観的幸福感)に焦点を絞ったうえで、さらに一歩踏み込んで各指標における数値や順位ズレからインドの環境と開発の性質を指摘している。インドの環境は持続不可能な状態にあり、なおかつ悪化傾向にあるという佐藤論文の悲観的な結論は、川島論文の食料事情の改善に対する明るい展望とは対照的で、比較の基準により描かれるインド像が著しく変わる点が非常に興味深い。さらに、所得や人間開発以外の要因によってインド人の主観的幸福感が規定されているのではないかという佐藤論文の示唆は、それ自体が比較を含意する国際的指標をさらに複数比較して初めて得られた貴重な指摘である。

このように今回の特集には、比較という軸は共有しつつも、その比較の範囲・射程をそれぞれ異にする多彩な論文が集まった。様々なテーマと視座、問題意識に基づく論文が活写する多様なインドの姿を目の当たりにし、地域研究における比較分析の重要性と必要性が改めて確認されたと言えるであろう。読者には、4本の論文の比較分析をそれぞれ比較して今回の特集を味読していただきたい。

ただ最後に後悔を述べるならば、比較というテーマの性質もあり、今回の特集では数値化しやすい分野の論文が目立たざるを得なくなった点は残念であり、反省している。だがこの特集が刺戟となって、量的分析だけでなく質的分析による比較研究や、両者の手法を組み合わせた論文が今後増えてくれるならば、これに勝る喜びはない。定性分析と定量分析の両面から「現代インドを比較する」研究が登場して地域研究の隘路を突き抜ける、その突破口として本特集が貢献できれば幸いである。

(『現代インド研究』第4号特集担当編集委員 上田知亮、佐藤隆広、萬宮健策)